

自己志向的完全主義の発達に影響を与える要因の検討

—社会的期待モデルに着目して—

杉山瑞歩¹・岡本祐子²

Factors influencing the development of self-oriented perfectionism: the social expectations model

Mizuho Sugiyama & Yuko Okamoto

Perfectionism is a personality characteristic involved in various negative outcomes, including mental disorder. Perfectionism, which demands perfection of oneself, is called “self-oriented perfectionism.” In the present study, we focused on the social expectations model in which parental expectations make children perfectionists to investigate the differences in perceived parental expectations and the method of receiving parental expectations on several types of self-oriented perfectionists using a questionnaire survey (Study 1) and interviews (Study 2). The results of Study 1 showed that two types of self-oriented perfectionists differed in their method of receiving parental expectations. The results of Study 2 showed qualitative differences in perceived parental expectations and the method of receiving them between two types of self-oriented perfectionists. The findings suggest the possibility that the social expectations model has limitations in its application to self-oriented perfectionists who show a tendency to be concerned with their mistakes.

Key words: Perfectionism, Expectation, Parent-child relationship

問題と目的

過度に完全性を求めることを完全主義 (perfectionism) と言う (大谷・桜井, 1995)。完全主義は、広範な精神疾患や精神的健康の悪化との関連が報告される性格傾向であり (大谷, 2004), 多くの研究がなされてきた。海外における完全主義研究の多くは, Hewitt & Flett (1990, 1991a, b) のモデルに基づいてなされている。Hewitt & Flett (1991b) は完全主義を, 自身に完全を求める自己志向的完全主義 (self-oriented perfectionism), 他者に対して完全を求める他者志向的完全主義 (other-oriented perfectionism), 周囲から完全を求められるように感じる社会規定的完全主義 (socially prescribed perfectionism) の3種類に分類している。Hewitt & Flett (1991a) はこれらを測定する多元的完全主義

¹ 広島大学大学院教育学研究科附属心理臨床教育研究センター

² 広島大学大学院教育学研究科

尺度 (Multidimensional Perfectionism Scale : 以下 MPS とする) を用い、自己志向的完全主義と社会規定的完全主義は抑うつと関連があることを報告している。

日本においては、大谷・桜井 (1995) が MPS の日本語版を作成し、自己志向的完全主義、他者志向的完全主義、社会志向的完全主義と、抑うつ・絶望感の関連を検討している。この結果、社会規定的完全主義については Hewitt & Flett (1991a) と同様の結果が得られたが、自己志向的完全主義は抑うつ・絶望感と負の相関を示すという先行研究とは異なる結果が示された。これより、自己志向的完全主義には適応的な側面と不適応的な側面が存在する可能性が示唆されたと考え、桜井・大谷 (1997) は、多次元的自己志向的完全主義尺度 (Multidimensional Self-oriented Perfectionism Scale : 以下 MSPS とする) を作成し、自己志向的完全主義の下位側面について検討を行っている。

MSPS は、Frost, Marten, Lahart, & Rosenblate (1990) の多次元完全主義尺度を参考に作成されている。多次元完全主義尺度は、自己志向的完全主義の視点からの 4 次元である「高目標設定」: 自分に高い目標を課する傾向 (personal standard : 以下 PS とする), 「失敗過敏」: 失敗を過度に気にする傾向 (concern over mistakes : 以下 CM とする), 「行動懸念」: 自分の行動に漠然とした疑いをもつ傾向 (doubting of actions : 以下 D とする), 秩序を重んじる傾向 (preference for order and organization : 以下 O とする), と社会規定的完全主義の視点からの 2 次元である、親からの高い期待を感じる傾向 (perception of high parental expectations), 親からの批判を感じる傾向 (perception of high parental criticism) の 6 つの次元から成る。桜井・大谷 (1997) は、PS, CM, D, O の 4 次元を Hewitt & Flett (1991b) の自己志向的完全主義をより構造的に捉えたものと考え、これらのうち因子分析における因子寄与率が低く、他の尺度と性質を異にすることなどを理由に全体の分析から除かれている O 尺度を除く PS, CM, D の 3 尺度に加え、完全主義の基本的な特徴と考えられる「完全欲求」: 完全でありたいという欲求 (desire for perfection : 以下 DP とする) を加えた。

そして桜井・大谷 (1997) は、MSPS と抑うつおよび絶望感との関連を検討し、DP は、それのみでは健康に対する影響力は少ないこと、PS はその傾向が高いほど抑うつや絶望感に陥りにくいこと、CM や D はその傾向が高いほど抑うつや絶望感に陥りやすく、不健康と関連する側面であることを示している。その後、日本では MSPS の下位尺度のそれぞれに焦点を当てて多くの研究が行われているが、その多くは桜井・大谷 (1997) の、DP は単体ではニュートラル、PS は適応的側面、CM, D は不適応的側面であるという結果を支持している (福井, 2009 ; 小堀・丹野, 2002 ; 大谷, 2004)。

このように、従来の研究では自己志向的完全主義のそれぞれの下位側面と他変数との関連が多く検討されてきているが、他方で、自己志向的完全主義者とはどのような人物かといった点に焦点を当てた研究はほとんど見当たらない (齋藤・今野・沢崎, 2009)。そこで齋藤他 (2009) は、自己志向的完全主義の下位尺度と様々な変数の関連を検討し、PS 傾向の強い者は他者と心理的な距離をとろうとする傾向があり、目標を達成しようという自己の課題に関心が向く特徴があること、CM 傾向の強い者は他者からの評価に敏感であり、他者の目に映る自分自身に関心が向く特徴があること、D 傾向の強い者は自分のしたことにやり残しがないかどうかといった自分の行動に関心が向く特徴があることが示唆されたとしている。

このように先行研究では、自己志向的完全主義はその下位側面から適応的な面・不適応的な面が

あること、どの側面の傾向が高いとどのような特徴があるかが次第に明らかになっていった。しかし、ポジティブな完全主義とネガティブな完全主義の個人内のバランスによって、ある特徴がどのように異なってくるかということ調べたものはまだ少ない (伊藤, 2004)。高坂 (2008) は、青年期における劣等感と自己志向的完全主義との関連を調べた研究において、MSPSの下位尺度の得点に基づいてクラスタ分析を行い、MSPSの4得点が全て低い「低群」、CM得点が全体平均よりも高いのが特徴である「CM優位群」、MSPSの全ての得点が全体平均よりも高い「高群」、PS得点が全体平均よりも高いことが特徴である「PS優位群」の4群に分けて分析を行っている。この結果、「CM優位群」は様々な劣等感が全体平均よりも全て高く、CMが劣等感を強める要因となっていることや、「高群」のCM得点が「CM優位群」と同じであるにも関わらず、劣等感の4得点が「CM優位群」よりも低いことより、PSの側面が劣等感を抑制する方向に働いた可能性が示されている。

これらより、自己志向的完全主義者の中でも、MSPSの下位側面の組み合わせによって精神的健康等の指標の高低やその特徴が異なる可能性が推察される。桜井・大谷 (1997) は、MSPSを用いて“自己に求める完全主義”の高い人低い人を特定し研究をするためには、個々のスコアリングの他に総合的なスコアリングも重要であると思われると述べている。したがって、自己志向的完全主義者の臨床像の把握のためには、複数の類型における特徴を捉えていく必要があると考えられる。

ところで、完全主義傾向はいかにして形成されるのだろうか。完全主義の発生・発達に関わる心理社会的な先行要因としては、両親などの重要他者のあり方が子どもに伝達される可能性を想定するモデルがいくつか存在する。代表的なモデルとして、Flett, Hewitt, Oliver, & Macdonald (2002) は社会的期待モデル (social expectations model), 社会的学習モデル (social learning model), 社会的反応モデル (social reaction model), 不安的養育モデル (anxious rearing model) の4つを挙げており、近年でも社会的期待モデルと社会的学習モデルに関して研究が進められている。

社会的期待モデルは両親が過度に子どもに期待をかけ、それを子どもが内面化して完全主義的になるというものである (大谷, 2010)。Flett et al. (2002) によると、子どもは、自分が完璧だった場合に親の承認が得られることを学ぶ。このモデルに関連するものとして、例えば、両親の期待に沿うという条件つきでしか与えられない愛情が子どもを完全主義にする (Hamachek, 1978) などの主張がある。社会的学習モデルは、Flett et al. (2002) によると、親に存在するであろう完全主義の模倣の役割に焦点を当てたものであり、すなわち、完全主義的な親を持つ子どもが親を模倣するというものである。社会的学習は、子どもは親の理想化された観念を持つという発達傾向の結果として、完璧に見える親のようになりたいという思いから生じると考えられている。

近年の研究としては、例えば、Appleton, Hall, & Hill (2010) は、若いアスリートとその親を対象に調査を行い、子どもの自己志向的完全主義は親の自己志向的完全主義に予測されること、子どもの社会規定的完全主義は親の社会規定的完全主義と他者志向的完全主義に予測されることを示している。また、Damian, Stoeber, Negru, & Băban (2013) は、思春期の子どもを対象に知覚された親の期待と批判が自己志向的完全主義と社会規定的完全主義を予測するか調査し、親の高い期待を感じていた子どもは後に社会規定的完全主義が増加するのに対し、自己志向的完全主義は増加しないことを明らかにし、社会的期待モデルは社会規定的完全主義に関しては支持されたが、自己志向的完全主

義については支持されなかったという結果を示している。また近年では、Frost et al. (1990) の多次元完全主義尺度の6次元のうち、親の期待と親の批判は完全主義それ自体の中心的な面ではなく、完全主義の発達的前提に相当し (Stoeber & Otto, 2006)、親の期待と親の批判は自己志向的完全主義と社会規定的完全主義の潜在的な発達的前提 (Damian et al., 2013) として考えられている。

これらから考えると、自己志向的完全主義には社会的学習が影響し、社会規定的完全主義は親の期待の影響を受けて発達している可能性が考えられる。しかし、海外で研究されている自己志向的完全主義は Hewitt & Flett (1990, 1991a, b) のモデルに基づくものであり、他方、日本で研究されている自己志向的完全主義は、4つの下位尺度のうち3つ (PS, CM, D) が Frost et al. (1990) のモデルに基づくもの、残りの1つ (DP) は桜井・大谷 (1997) によって独自に加えられたものであり、両者を完全に同じ概念として扱ってよいかについては疑問が残る。例えば、Enns, Cox, & Clara (2002) が適応的完全主義として PS, O, 自己志向的完全主義, 他者志向的完全主義を結び付け、不適応的完全主義として CM, D, 社会規定的完全主義を結び付けたモデルを説明しているように、海外の研究では自己志向的完全主義は PS や O に、社会規定的完全主義は CM や D に近いものとされることもある。Frost et al. (1990) の完全主義モデルの発達を扱ったものとしては例えば、McArdle & Duda (2008) が、知覚された親の期待が PS と正の関連があることを示している。これらを踏まえると、結果は必ずしも一貫していないが、完全主義の不適応的側面とされる CM や D の側面は親の期待の影響を受けて発達していること、PS は親の期待あるいは社会的学習の影響で発達している可能性が考えられる。

日本においては、河村 (2003) が親から感じる期待と青年の完全主義傾向との関連を検討している。この結果、母親・父親のどちらにおいても、期待が高いと子どもの完全主義傾向も高いことが示されており、社会的期待モデルを支持する結果が得られている。しかし、この研究においては完全主義尺度の全体得点を分析に用いており、完全主義の下位側面や完全主義者の類型によって親から受けた期待の影響が異なるかまでは検討されていない。また、渡部・新井・濱口 (2012) は、中学生における親からの期待と内的適応の関連を検討した研究において、従来期待研究で用いられてきた親から感じる期待の程度よりも、期待の受け止めの方が、適応指標への説明力が大きいことを明らかにしている。これらより、社会的期待モデルに焦点を当てて自己志向的完全主義について考えると、自己志向的完全主義の下位側面の高低による類型間で親から受けた期待の影響が異なるのかということについて、親から感じる期待の程度だけでなく期待の受け止め方にも着目して検討を行う必要があると考えられる。

完全主義が様々な心理的不適応と関連することは、多くの研究で示されている。しかし、完全主義の発達にどの要因が影響を与え、それがどのように形成されていくのかに関して、日本ではほとんど研究がなされていない。自己志向的完全主義の発達について詳細に検討することは、完全主義者が完全主義的な傾向を持つ背景や、その人にとって完全主義とはどのような意味を持つものなのかを考える臨床的視点において有用であると考えられる。また、自己志向的完全主義は下位側面の高低の類型間で異なった特性を持ち、完全主義の発達に影響を与えた要因に違いがある可能性が考えられる。さらに、CM や D の発達に親の期待が影響する可能性がある点、親からの期待の受け止

め方が子どもの内的適応に影響するという点を考慮すると、社会的期待モデルに着目して自己志向的完全主義の発達の検討を行うことは有意義であるといえるだろう。

なお、日本で研究されている自己志向的完全主義との関係において、精神的健康の指標として多くの研究で抑うつが取り上げられ、特に CM と抑うつとの関連が示されている (福井, 2009; 小堀・丹野, 2002; 大谷, 2004; 桜井・大谷, 1997)。そこで、本研究でも精神的健康の指標として抑うつを用いることとする。以上のことを踏まえて、本研究では自己志向的完全主義者の類型間における親から感じた期待とその受け止め方に差異について、質問紙調査 (研究 1) と面接調査 (研究 2) によって検討することを目的とする。また、研究 1 では類型間の抑うつの差異についても検討を行う。

研究 1

目的

対象者を自己志向的完全主義の下位側面の高低により分類し、その類型間における抑うつ、親から感じた期待、期待の受け止め方の差異について検討する。

方法

調査手続き A 大学の学生を対象に授業時間の一部または休み時間を用いて質問紙調査を実施した。調査時期は 2016 年 1 月～2 月であった。質問紙を回収できた人数は全部で 315 名であったが、対象者の年齢が 30 歳以上のもの ($N=3$), 1 尺度に欠損が 3 箇所以上見られたもの ($N=2$) を除外し、310 名を分析対象とした (男性 127 名, 女性 183 名)。平均年齢は 20.95 歳 ($SD=1.63$) であった。

質問紙の構成 (a) 桜井・大谷 (1997) による多次元的自己志向的完全主義尺度 (MSPS)。20 項目, 6 件法。「DP」, 「PS」, 「CM」, 「D」の 4 つの下位尺度から成る。(b) 河村 (2003) による親から感じる期待尺度。23 項目, 4 件法。「進学・学業期待」, 「社会への適応期待」, 「就職期待」, 「従順・見栄」, 「苦勞への報い期待」の 5 つの下位尺度から成る。原版は高校生用であるが、本研究では大学生を対象としたため、教示を「以下には、親が子どもに対して抱く様々な思いが述べられています。あなたが中学生・高校生の頃、あなたの親はそれぞれの項目に示した思いをどの程度持っていたと思いますか」と改めた。(c) 渡部・新井・濱口 (2012) による親の期待に対する子どもの期待の受け止め方尺度 (以下期待の受け止め方尺度とする)。23 項目, 4 件法。「積極的受け止め」, 「負担的受け止め」, 「失望回避的受け止め」の 3 つの下位尺度から成る。原版は中学生用であるが、本研究では大学生を対象としたため、教示を「親の期待についてお尋ねします。以下の文章について、以前 (中学生・高校生の頃) あなたはどのように思っていましたか」と改めた。(d) うつ病の疫学研究用自己評価尺度の日本語版 (島・鹿野・北村・浅井, 1985) (以下 CES-D とする)。20 項目, 4 件法。(e) フェイスシート: 性別, 年齢, 学年。(f) 面接調査への協力の可否。

結果と考察

各尺度の因子分析 まず、MSPS について原版の因子構造にならない確認的因子分析を行い、適合度について検討した。適合度は $\chi^2=706.43$, $df=164$, $n.s.$, $CFI=.77$, $RMSEA=.10$, $AIC=838.43$ であり、Cronbach の α 係数は「DP」=.83, 「PS」=.76, 「CM」=.78, 「D」=.62 であった。適合度が低

いため、プロマックス回転・最尤法にて探索的因子分析を行った (Table 1)。結果、原版とは異なる 3 因子構造を示したが、.40 以上の負荷量を示した項目のまとまり方を考慮すると原版で示される「D」のみが消失し、「DP」、「CM」、「PS」の 3 側面は保たれていると考えられるため、第 1 因子に高い負荷を示したもの (項目 4, 5, 16, 9, 13) は「完全欲求 (DP)」, 第 2 因子に高い負荷を示したもの (項目 19, 17, 10, 6) は「失敗過敏 (CM)」, 第 3 因子に高い負荷を示したもの (項目 14, 7, 11, 3 (逆転)) は「高目標設定 (PS)」と原版通りの命名が可能であると判断した。

Table 1

MSPS探索的因子分析結果(最尤法・プロマックス回転)				
下位尺度/項目	1	2	3	h^2
<完全欲求 (DP)> ($\alpha = .86$)				
4_何事においても最高の水準を目指している。	.907	-.158	.038	.767
5_どんなことでも完璧にやり遂げるのが私のモットーである。	.885	-.010	-.031	.758
16_できる限り、完璧であろうと努力する。	.640	.054	.123	.509
9_物事は常にうまくできていないと気がすまない。	.551	.319	-.101	.516
13_中途半端な出来では我慢できない。	.527	.064	.150	.386
<失敗過敏 (CM)> ($\alpha = .79$)				
19_完璧にできなければ、成功とはいわない。	-.061	.851	.146	.675
17_少しでもミスがあれば、完全に失敗したのも同然である。	-.132	.844	.138	.625
10_人前で失敗することなど、とんでもないことだ。	.183	.561	-.154	.449
6_ささいな失敗でも、周りの人からの評価は下がるだろう。	.032	.529	-.046	.300
<高目標設定 (PS)> ($\alpha = .67$)				
14_自分の能力を最大限に引き出すような理想をもつべきである。	.172	-.003	.642	.522
7_高い目標をもつ方が、自分のためになると思う。	.149	-.066	.594	.446
11_簡単な課題ばかり選んでは、だめな人間になる。	-.035	.185	.581	.328
3_“失敗は成功のもと”などは考えられない。	.103	.349	-.468	.381
因子間相関				
1	—	.38	.36	
2		—	-.11	
3			—	

続いて、親から感じる期待尺度について、原版の因子構造にならない確認的因子分析を行い、適合度について検討した。適合度は $\chi^2=647.86$, $df=220$, $n.s.$, $CFI=.83$, $RMSEA=.08$, $AIC=805.86$ であり、Cronbach の α 係数は「進学・学業期待」=.83, 「社会への適応期待」=.61, 「就職期待」=.76, 「従順・見栄期待」=.78, 「苦勞への報い期待」=.52 であった。適合度がやや低いため、プロマックス回転・最尤法にて探索的因子分析を行った (Table 2)。結果、原版の 5 因子構造より少ない 3 因子構造を示したが、項目のまとまり方を考慮すると第 1 因子に高い負荷を示したもの (項目 6, 14, 8, 3) は、全て原版の「進学・学業期待」に含まれるものであり、「進学・学業期待」と命名可能であると判断した。第 2 因子に高い負荷を示したもの (項目 10, 22, 2, 21) は、原版の「就職期待」と同様の項目であったため「就職期待」と命名した。第 3 因子に高い負荷を示したもの (項目 13, 17) は両方とも原版の「苦勞への報い期待」に含まれるものであったため「苦勞への報い期待」と命名可能であると判断した。

Table 2

親から感じる期待尺度探索的因子分析結果(最尤法・プロマックス回転)				
下位尺度/項目	1	2	3	h^2
＜進学・学業期待＞ ($\alpha = .87$)				
6_名の知れた大学へ行ってほしい。	.900	-.033	.015	.789
14_大学に行くのは当たり前, 少しでもランクの高い大学に行ってほしい。	.874	-.074	.003	.708
8_なるべくなら, 偏差値の低い大学には行ってほしくない。	.766	.086	-.102	.630
3_就職先の選択の幅が広がるようにいい大学に行っておくといい。	.570	.099	.112	.434
＜就職期待＞ ($\alpha = .76$)				
10_景気の波に左右されるような会社には就職してほしくない。	-.085	.876	.040	.716
22_業績の悪いような会社には就職してほしくない。	.025	.775	-.099	.599
2_公務員などの安定した職業についてほしい。	.023	.460	.042	.233
21_国家資格取得と結びつくような学部を選んでほしい。	.195	.447	.049	.337
＜苦勞への報い期待＞ ($\alpha = .63$)				
13_子どもが夜遅くまで勉強しているのに合わせて起きていることで励みになってほしい。	-.022	.007	.753	.562
17_夜食などを作ってやれば, 頑張ってる勉強してくれるはずだ。	.032	.003	.597	.366
因子間相関				
	1	—	.48	.22
	2		—	.19
	3			—

続いて、期待の受け止め方尺度について、原版の因子構造にならない確認的因子分析を行い、適合度について検討した。適合度は $\chi^2=832.53$, $df=227$, $n.s.$, $CFI=.86$, $RMSEA=.09$, $AIC=976.53$ であり、Cronbach の α 係数は「積極的受け止め」= .92, 「負担的受け止め」= .91, 「失望回避的受け止め」= .74 であった。CFI と RMSEA の値より必ずしも十分な適合度であるとは言えないが、CFI が .90 に近く、RMSEA も .10 未満であるため、この尺度は原版のまま使用することとした。

MSPS 得点によるクラスタ分析 続いて、MSPS 下位因子の因子得点を用いて階層的クラスタ分析 (Ward 法・平方ユークリッド距離) を行い、5 クラスタを抽出した。クラスタ数は、デンドログラムおよび解釈可能性に基づいて決定した。なお、因子得点は平均値が 0, 標準偏差が 1 になるよう標準化したものを用いた。クラスタ分析の結果を Figure 1 に示す。

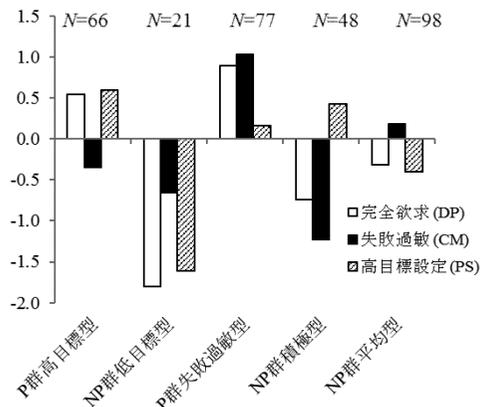


Figure 1. MSPS下位因子によるクラスタ分析結果

続いて、各クラスタの特徴を検討するために、クラスタを独立変数、MSPS3 下位因子を従属変数とした 1 要因分散分析を行った (Table 3)。なお、多重比較は Tukey HSD 法を用いた。クラスタ命名のため、完全主義の基本的な側面と考えられる「DP」が平均より高いクラスタを完全主義群 (以下 P 群とする)、その他を非完全主義群 (以下 NP 群とする) とした。クラスタ 1 は「PS」がクラスタ 4 以外の全てのクラスタに対して有意に高く、完全性を求めると同時に高い目標を設定する型と考えられ、P 群高目標型とした。クラスタ 2 は全てのクラスタに対して「DP」、「PS」が有意に低く、完全性を求めたり高い目標を設定したりはしにくい型と考えられ、NP 群低目標型とした。クラスタ 3 は全てのクラスタに対して「DP」、「CM」が有意に高く、完全性を求めるが過度に失敗を恐れやすい型と考えられ、P 群失敗過敏型とした。クラスタ 4 は全てのクラスタに対して「CM」が有意に低い「PS」は平均より高く、完全性を求めたり失敗を恐れたりすることなく高い目標を設定して積極的に物事に取り組める型と考えられ、NP 群積極型とした。クラスタ 5 は「DP」は平均より低い「CM」は P 群失敗過敏型に次いで 2 番目に高く、完全性を求めたり高い目標を設定したりはしにくいやや失敗を恐れる傾向のある型と考えられる。しかし他の型と比べ大きな特徴は見られないため、NP 群平均型とした。

Table 3

	各クラスタを要因としたMSPS因子得点の1要因分散分析結果					F 値	多重比較
	クラスタ1 P群高目標型 (N=66)	クラスタ2 NP群低意欲型 (N=21)	クラスタ3 P群失敗過敏型 (N=77)	クラスタ4 NP群積極型 (N=48)	クラスタ5 NP群平均型 (N=98)		
完全欲求 (DP)	.54 (.51)	-1.81 (.48)	.89 (.61)	-.74 (.68)	-.32 (.48)	F(4,305)=150.60**	3>1>5>4>2
失敗過敏 (CM)	-.35 (.42)	-.66 (.88)	1.03 (.69)	-1.23 (.48)	.18 (.40)	F(4,305)=148.35**	3>5>1,2>4
高目標設定 (PS)	.60 (.60)	-1.62 (.71)	.16 (.84)	.42 (.60)	-.40 (.46)	F(4,305)=64.49**	1,4>5>2 1>3>5>2

** $p < .01$, * $p < .05$
() は標準偏差を表す

これらより、自己志向的完全主義者の類型としては、P 群高目標型と P 群失敗過敏型の 2 類型が考えられる。「PS」と「CM」のどちらも高く、典型的な自己志向的完全主義者と考えられるクラスタも抽出されると想定していたが、そのようなクラスタは抽出されなかった。また、「DP」が全体の平均値より低く、完全主義傾向は高くはないと思われる 3 クラスタも抽出されたが、これらについても、P 群と比較検討するため、それぞれ分析を行った。

各クラスタを要因とした CES-D 得点の 1 要因分散分析 続いて、クラスタ間で CES-D 得点に差異があるかどうかを検討するため、クラスタを独立変数、CES-D 因子得点を従属変数とした 1 要因分散分析を行った (Table 4)。なお、多重比較は Tukey HSD 法を用いた。抑うつ平均値が最も高かったのは P 群失敗過敏型であったが、NP 群低目標型、NP 群平均型との間に有意差は見られなかった。しかし P 群同士を比較すると、失敗過敏型は高目標型に比べて CES-D 得点が有意に高く、より抑うつのな型であることが示された。

各クラスタを要因とした親から感じる期待尺度得点の1要因分散分析 次に、クラスタ間で親から感じる期待尺度得点に差があるかどうかを検討するため、クラスタを独立変数、親から感じる期待尺度の因子得点を従属変数とする1要因分散分析を行った (Table 4)。なお、多重比較はTukey HSD法を用いた。結果として、「進学・学業期待」、「就職期待」、「苦勞への報い期待」の全下位因子において、クラスタ間における有意差は見られなかった。しかし、下位因子レベルで見ると、「PS」は親から感じる期待尺度の3下位因子全てにおいて有意な相関は見られなかったのに対し、「CM」は「進学・学業期待」、「就職期待」に有意な正の相関を示し、CMと親の「進学・学業期待」や「就職期待」には関連性があると考えられる。

Table 4

各クラスタを要因とした各因子得点の1要因分散分析結果

	クラスタ1 P群高目標型 (N=66)	クラスタ2 NP群低目標型 (N=21)	クラスタ3 P群失敗過敏型 (N=77)	クラスタ4 NP群積極型 (N=48)	クラスタ5 NP群平均型 (N=98)	F値	多重比較
CES-D	-.20 (.87)	.13 (1.13)	.26 (1.07)	-.56 (.63)	.18 (.89)	$F(4,305)=7.94^{**}$	3,5,2>4 3>1
進学・学業期待	-.06 (.93)	-.03 (1.07)	.11 (.97)	-.31 (1.02)	.11 (.86)	$F(4,305)=1.92$	—
就職期待	-.10 (.89)	-.33 (.91)	.12 (.94)	-.10 (1.02)	.09 (.85)	$F(4,305)=1.62$	—
苦勞への報い期待	.05 (.79)	-.33 (.81)	.11 (.86)	-.15 (.92)	.02 (.74)	$F(4,305)=1.68$	—
積極的受け止め	.34 (.79)	-.54 (1.15)	-.08 (1.10)	.11 (1.05)	-.11 (.81)	$F(4,305)=4.53^{**}$	1>5,2
負担的受け止め	-.28 (.78)	.08 (1.30)	.24 (1.01)	-.33 (.99)	.14 (.88)	$F(4,305)=4.68^{**}$	3,5>1,4
失望回避的受け止め	.25 (.70)	-.57 (1.19)	.18 (.92)	-.10 (1.02)	-.14 (.78)	$F(4,305)=5.15^{**}$	1>5,2 3>2

** $p < .01$, * $p < .05$
()は標準偏差を表す

各クラスタを要因とした期待の受け止め方尺度得点の1要因分散分析 次に、クラスタ間で親の期待に対する受け止め方尺度得点に差があるかどうかを検討するため、クラスタを独立変数、期待の受け止め方尺度の因子得点を従属変数とする1要因分散分析を行った (Table 4)。なお、多重比較はTukey HSD法を用いた。まずP群のみで比較すると、「積極的受け止め」、「失望回避的受け止め」についてはP群高目標型とP群失敗過敏型間で有意差は見られなかったが、「負担的受け止め」はP群失敗過敏型がP群高目標型に対して有意に高かった。したがって、P群失敗過敏型はP群高目標型に比べて親の期待をより負担的に受け止めていたことが考えられる。また、P群NP群間をはっきりと分ける期待の受け止め方の差異は見られなかったが、NP群低目標型に対しては、P群の2類型とも「失望回避的受け止め」が有意に高かった。

全体的考察

研究1では、自己志向的完全主義者と考えられる2クラスタ、その他の3クラスタが抽出された。自己志向的完全主義の2類型においては、P群高目標型に対しP群失敗過敏型はより抑うつ的な型であることが示された。親から感じる期待は、自己志向的完全主義者の2類型間で有意差は見られ

なかったが、CMと「進学・学業期待」や「就職期待」には関連性があることが示された。また、P群失敗過敏型はP群高目標型に比べ、より親の期待をネガティブに捉え苦しんでいる可能性が示唆された。しかし、研究1は質問紙を用いた調査であり、子どもが実際にどのような期待を感じ、それをどのように受け止めたのかについての詳細の検討には限界がある。そこで、研究2では面接調査によって、感じた親の期待とその受け止め方について、より詳細に検討することとした。

研究2

目的

自己志向的完全主義者の類型間で、親から感じた期待とその受け止め方に関して質的な差異が見られるかについて、また、研究1で差異が見られなかったP群高目標型とNP群積極型間、P群失敗過敏型とNP群平均型間において質的な差異が見られるかについて、詳細に検討する。なお、完全主義者の類型とは、研究1で行ったMSPS下位因子得点に基づくクラスタ分析によるものである。

方法

調査手続き 質問紙調査において面接調査への協力の同意が得られた方に連絡をし、返信があった29名(男性12名、女性17名、19～26歳)に面接調査を実施した。P群高目標型8名、NP群低目標型4名、P群失敗過敏型7名、NP群積極型5名、NP群平均型5名であった。1人あたり90分程度の半構造化面接を実施した。調査時期は2016年6月～11月であった。質問内容は、(a)親・兄弟の人物像について、(b)親から感じた期待について、(c)期待に対してどのように感じたか、であった。面接の場所は、個室を使用し、対象者のプライバシーが守られるよう配慮した。面接開始前には倫理的配慮の説明を行い、ICレコーダーでの録音についての許可を得て、面接調査承諾書に署名を得た。また、研究結果報告書の送付の希望について確認を行った。なお、本調査の実施に関しては、平成28年度広島大学大学院教育学研究科倫理審査委員会の承認を得ている。

分析方法 分析は、佐藤(2008)による質的データ分析法を参考にして行った。分析のおおまかな流れは、以下の通りである。面接の録音から逐語記録を作成し、基本的な意味単位を切り取る。次に帰納的にコードを付与し、さらにそのコードを基により抽象化したコードを、焦点的コード、大コードの順に付与していく。その後、コード同士の関係を明らかにしていく。なお、一部コードの作成にあたっては、研究1で用いた尺度や池田(2009)による親の期待に対する反応様式を参考にした演繹的アプローチも用いた。以下、大コードを< >、焦点的コードを【 】で示す。

結果と考察

焦点的コードとその定義をTable 5に示す。

Table 5

各焦点的コードの定義

大コード	焦点的コード	定義
子に対する親の態度	理想的期待	親の思い描く理想像を反映した強い期待。
	現実的期待	親が子に対して持つ現実的で適度な期待や思い。
	種まきの期待	親が子に対して意見を聞きつつ何らかのチャンスを与えるような期待。
	積極的関与	親が子どもの問題に積極的に関わろうとする態度。
	期待の意図的非表示	親が期待を意図的に表示しないように心がけているような態度。
	最低限への要求	親の考える最低限のラインに達することを要求するような態度。
	子ども主体的・放任的態度	子に対して好きにすればいい、自由にすればいいとするような態度。
	子どもの意思の尊重	親が子どもの意思を尊重するような態度。
	受容的・応援的態度	子どものありのままを受け入れたり応援したりするような態度。
	否定的態度	子に対して可能性や子のやりたいことを否定するような態度。
期待への反応	積極的受け止め	親の期待に対してポジティブに受け止めている状態。
	負担的受け止め	親の期待に対してネガティブで負担的に受け止めている状態。
	期待に応えたい	親の期待に応えたいと感じている状態。
	期待に応えられない絶望	親の期待に応えられないことに対し、絶望的に感じる状態。
	中立的受け止め	親の期待を両義的に感じている状態。
	期待への反発	親の期待に対して反発を示している状態。
	期待の軽視	親の期待に振り回されず聞き流したり気にしなかつたりしている状態。
	期待と自分の思いの一致による自然な感覚	親の思いと子どもの思いが一致し、親の思いを抵抗なく感じている状態。
	期待に応えることへの限界の認識	親の期待に応えることには限界があるということを認識している状態。
	期待への表面的な迎合	親の目が届く範囲でのみその期待に合わせているような状態。
自分の生き方の尊重	自分の意思で自分の生き方を決め、自らの生き方を大切にしようと考えている状態。	
親イメージ	非干渉・寡黙	非干渉的であったり寡黙であったりという親イメージ。
	優しい・穏やか・受容的	優しい、穏やか、受容的であるという親イメージ。
	信頼・安心感・理解がある	信頼できる、安心感がある、自分に対して理解があるという親イメージ。
	厳しい	厳しいという親イメージ。
	几帳面・細かい・きっちり	几帳面、細かい、きっちりしているという親イメージ。
	怖い	怖いという親イメージ。
	周りを気にしない・動じない	周りを気にしない、周りのことに動じないという親イメージ。

P群高目標型 親の理想を反映した強い期待である【理想的期待】を感じていたのは1名のみであった。“医学部に行ってほしい、無理ならせめてある特定の大学に進学してほしい”という【理想的期待】を感じていた対象者では、“重荷、苦しかったですね”と【負担的受け止め】の反応を示しつつ、“自分の人生なので勝手に描かれる筋合いはないと強く思っていました”という【期待への反発】，“一時期期待させたのは自分なんですけど道を選ぶのは自分なんです”という【自分の生き方の尊重】の語りが見られた。また、“一般的な企業に就職して一般的な社会人になってほしい”という【現実的期待】を感じていた対象者は、“応えられないなと思ってました。その能力がないな”という【期待に応えることへの限界の認識】の語りが見られた。また、田舎で長く続く家に帰ってきてほしいという【現実的期待】を感じていた対象者は、地元以外で就職試験を受けることについて“いつか話さないといけな”と【自分の生き方の尊重】の語りが見られた。これらより、この

型では親の【理想的期待】や【現実的期待】を感じたとしても、子どもはその期待に応えようと必死になるのではなく、【期待に応えることへの限界の認識】や【期待への反発】を行いつつ、【自分の生き方の尊重】をすることで、親の期待に構わず、自分の意思に従った生き方をすることができると考えられ、社会的期待モデルで想定される状態像は当てはまりにくいことが推察される。

NP 群低目標型 この型では全ての対象者において、親の【理想的期待】を感じていたものは見られなかった。ただし、“勉強はちゃんとしてほしいなぐらいの期待はあった”といった【現実的期待】は3名で感じられていた。他方<期待への反応>は、親の【現実的期待】を感じていた3例全てにおいて“期待に応えなかったからって何かあるわけでもない”といった【親の期待の軽視】の語りが見られた。また、“私には無理だよお父さんって思いましたね”のような【親の期待に応えることへの限界の認識】も見られた。また、この型の全ての対象者において、“子どもをそのまま許してくれる”といった【受容的・応援的態度】と“中学校高校の時はほんとに何も言われず任されてた気がします”といった【子ども主体的・放任的態度】が見られた。

したがって、この型では親の子どもへの期待はあるものの、その程度は適度で現実的なものに留まり、他方で子どもに対し自由にさせ、同時にありのままを受容し応援するような態度が特徴的であると考えられる。同時に、子どもの側も期待を重く受け止めず、軽く受け止めたり、期待に応えることには限界があることを認識したりしており、期待をあまり気にしないような反応が生じやすかったと推察される。また、この型では4名全てにおいて母親の【優しい・穏やか・受容的】という<親イメージ>が語られた。子どもが自身のありのままの姿を認められやすく、完璧を目指したり失敗を恐れたりする必要がないという点は、子どもが完全主義とは正反対の傾向を示したことに寄与していると考えられる。

P 群失敗過敏型 この型では、7名中6名において“中学校の頃はいわゆる高校進学のための期待が多かったでしょうね。もうここ的高校だって結構言われたので”や“自分の子どもはどどこか大学に行ってるんですよっていうのを言って恥ずかしくない学校に行ってほしいみたいな”といった親の【理想的期待】が感じられていた。他方、<期待への反応>は、“期待に応えたいというのが非常に強くて(中略)父親がそういうふうに願っているからその思いに応えたい”、“母親の思いに応えるってことだけがやっぱりあの頃は全てだったのかな”のような【期待に応えたい】という語りが、【理想的期待】を感じていた6名のうち5名に見られた。また、【期待に応えたい】理由として、親を喜ばせたい、期待に応えられなければ親が悲しむのでは、といった親の気持ちを考慮するような語りが見られており、親がどう思うかを気かけながら生きてきたことが推察される。また3名では、親の期待を“プレッシャーとまでは言わないんですけど楽しくやらないとっていうのはあります”、“応えられた時は良かったなって思いはあったんですけどいつ応えられなくなるかもしれないみたいな思いがずっとあって”といった【負担的受け止め】の語りが見られた。したがって、親の気持ちを考慮し、親の期待に応えたいと考えると同時にその期待が負担になっているという特徴が考えられる。また、期待に応えられない場合について、“結構すごい人生が変わっていたと思いますから下手するとうつじゃないんですけど最悪そっちに転んでたかもしれません”、“思いに沿えないのはすごくだめなこと”、“期待に応えることができなかったという現実直面した時に

かなり苦しかったので (中略) かなり絶望感を抱きまして両親に申し訳ない気持ちしかなかったの
で”, “裏切ってしまった, 大変なことをしてしまった” といった【期待に応えられない絶望】の
語りが見られた。これらの点からも, この型では子どもにとっての親の期待の影響は非常に強く,
P 群失敗過敏型の場合には, 社会的期待モデルによる説明が可能であると考えられる。

NP 群積極型 この型では, 5 名中 1 名が勉強に関する親の【理想的期待】を感じており, 残り 4
名が【現実的期待】を感じていた。また, その他の<子に対する親の態度>としては, 【現実的期待】
を感じていた 4 名において, 【子ども主体的・放任的態度】が見られ, また同じ 4 名において, 辛い
時に励ましてくれる, 勉強や部活を応援してくれるといった【受容的・応援的態度】が見られた。

【現実的期待】に対する<期待への反応>では, “私の好きなようにするし” といった【自分の生き方
の尊重】の語りが見られた。また, 【理想的期待】を感じていた対象者では, この期待に対し【期
待に応えたい】の語りが見られたが, 親の価値観や意見と自分の思いが違う場合は“私も意見を母
に対してぶつけてるので (中略) 反論していますね” という【期待への反発】の語りが見られた。
したがって, この型では, 常に親の思いに沿おうとするのではなく, 親と自分の思いにズレが生じ
た場合には自分の思いを大切にすることが考えられる。

NP 群平均型 この型では, 5 名中 1 名が【理想的期待】を, 4 名が【現実的期待】を感じていた。
【理想的期待】を感じていた対象者では, “お父さんの願いに関しては今のところ人生通してずっと
反抗してますね” という【期待への反発】の語りや“私にとっては豚に真珠, 馬に念仏みたいな感
じです。聞こえない聞こえないみたいな(笑)” という【期待の軽視】の語りも見られた。

“勉強とか学生の本分であるところをきちんとしてほしい” という【現実的期待】を感じていた
対象者では, 【期待に応えたい】の語りが見られたが, 同時に“ある程度の成績を取ることを期待さ
れているのは自分の希望とも合致してたのであんまり苦ではなくて” という【期待と自分の思いの
一致による自然な感覚】の語りや“それ自身もそんなに大きいプレッシャーとしては捉えてなくっ
てそんなに圧はなかったかな” という【期待の軽視】の語りも見られた。

この型では, 【理想的期待】や【現実的期待】を感じても, 【期待への反発】や【自分の生き方の
尊重】の反応が見られ, 自分の思いを大切にしていると推察される。また, 3 名に【期待の軽視】
の語りが見られ, 期待をされても軽く流しやすいと考えられる。

P 群高目標型と P 群失敗過敏型の比較 【理想的期待】を感じていたのは P 群高目標型では 8 名
中 1 名のみであったのに対し, P 群失敗過敏型では 7 名中 6 名であった。このことより, P 群高目
標型と P 群失敗過敏型では感じてきた親の期待そのものに質的な差異があり, 失敗過敏型はより親
の理想を反映した強い期待を感じていた可能性が考えられる。期待の受け止め方については, 研究
1 において「負担的受け止め」(e.g. 「期待されると重荷に感じる」) が高目標型に対して失敗過敏型
の方が高いという有意差が見られていたため, 失敗過敏型は親の期待をより負担的に受け止めやす
いと考えられた。研究 2 においては, 【負担的受け止め】の語りは, 両方の型で見られているが, 失
敗過敏型ではより親の気持ちを考慮するような語りが見られたり, 高目標型では見られなかった【期
待に応えられない絶望】の語りが見られたりしたことから, 単に期待されて嫌, 苦しいという気持ち
だけでなく, 期待に応えられないと自分の価値がなくなるというような非常に苦しい思いを抱き

やすいと推察される。なお、そもそも失敗過敏型の方がより親の理想を反映した強い期待を感じていた点も、高目標型に比べて失敗過敏型の方が親の期待をより負担的に受け止め、期待によって苦しい思いを抱きやすいことに関連していると考えられる。

P 群高目標型と NP 群積極型の比較 研究1の質問紙調査においては、P 群高目標型と NP 群積極型間で、親から感じた期待と期待の受け止め方に差異は見られなかった。面接調査においても、どちらの型も【理想的期待】が1名ずつに見られ、また【現実的期待】を感じていた対象者もそれぞれ見られた。〈期待への反応〉も【自分の生き方の尊重】の語りや【期待への反発】の語りがどちらの型にも見られ、両者とも自分の思いを大切にしていると考えられる。ただし、親との関係性について、NP 群積極型では【受容的・応援的態度】を5名中4名が感じており、他方 P 群高目標型では8名中4名が、親が子どものやりたいことや可能性を否定する【否定的態度】を感じていた。このような点から、P 群高目標型の場合はより親子関係が上下関係的で厳しいものであるのに対し、NP 群積極型の場合はより親子関係が穏やかで、親は子どもを受容していくような関係であるといった差異がある可能性が考えられる。

P 群失敗過敏型と NP 群平均型の比較 研究1ではこの2クラス間においても、感じた親の期待と期待の受け止め方に差異は見られなかった。しかし、面接調査においては、【理想的期待】が P 群失敗過敏型では7名中6名で感じられていたのに対し、NP 群平均型では5名中1名のみでしか感じられておらず、P 群失敗過敏型と NP 群平均型では感じていた親の期待そのものに質的な差異があった可能性が考えられる。また、上述のように P 群失敗過敏型では親の期待が本人に影響しやすく、苦しい思いをしやすいつわられた。しかし、NP 群平均型では親からの期待を感じても【期待への反発】や【自分の生き方の尊重】、【期待の軽視】の反応が見られ、親の思いはそこまで子どもに影響しないことが考えられる。NP 群平均型でも【期待に応えたい】の語りをした対象者が見られたが、その対象者は【期待と自分の思いの一致による自然な感覚】を感じており、また【期待の軽視】の語りも見られたことから、本人にとって期待に応えるということが P 群失敗過敏型の対象者ほど重大な問題ではなかったことが考えられる。

総合考察

本研究の目的は、社会的期待モデルに着目して、自己志向的完全主義者の類型間で親から感じた期待とその受け止め方に差異があるのかについて検討することであった。研究1において、クラスタレベルでは自己志向的完全主義者の2類型間において親から感じた期待に差異は見られなかったものの、「CM」と親が子どもに抱く学業や就職に関する期待の関連性が示された。また期待の受け止め方については、P 群高目標型に比べ P 群失敗過敏型の方が「負担的受け止め」が有意に高く、より親の期待をネガティブに捉え苦しんでいる可能性が示唆された。研究2の面接調査では、P 群高目標型において【理想的期待】を感じていたのが8名中1名であったのに対し、P 群失敗過敏型は7名中6名であり、P 群間で親の抱く期待に質的な差異があったことが推察される。〈期待への反応〉に関しては、P 群高目標型が【期待に応えることへの限界の認識】や【期待への反発】、【自

分の生き方の尊重】といった、期待を感じてもそれに応えることに必死になるのではなく、自分の生き方を大切にしていくなりに見られたのに対し、P群失敗過敏型ではより親の考えや思いを考慮するような語りやP群高目標型では見られなかった【期待に応えられない絶望】の語りが見られた。これらより、社会的期待モデルで想定されるような状態像は、P群失敗過敏型には当てはまる可能性が高いが、P群高目標型に関しては、社会的期待モデルによる説明は難しいことが考えられる。

以上より、本研究では自己志向的完全主義者の類型によって親から感じた期待とその受け止め方に差異があること、社会的期待モデルの適用範囲は「CM」の高さに特徴づけられるP群失敗過敏型に限られる可能性があることが示された。しかし、本研究では、質問紙調査、面接調査共に対象者がある特定の大学の学生に限られている。したがって、一定の教育水準である基本的に健康な学生に対象者が限られ、サンプリングの偏りがあることが予想される。そのため、さらに幅広い層の対象者による自己志向的完全主義と親の期待との関連の検討が必要であると考えられる。また、本研究では、面接調査の対象者が各クラスから4名～8名と少人数であり、各クラスの臨床像の正確な把握のためには、よりサンプルサイズを増やした質的な調査が望ましいと考えられる。これらのことは、本研究の今後の課題といえるだろう。

引用文献

- Appleton, P. R., Hall, H. K., & Hill, A. P. (2010). Family patterns of perfectionism: An examination of elite junior athletes and their parents. *Psychology of Sport and Exercise*, **11**, 363-371.
- Damian, L. E., Stoeber, J., Negru, O., & Băban, A. (2013). On the development of perfectionism in adolescence: Perceived parental expectations predict longitudinal increases in socially prescribed perfectionism. *Personality and Individual Differences*, **55**, 688-693.
- Enns, M. W., Cox, B. J., & Clara, I. (2002). Adaptive and maladaptive perfectionism: Developmental origins and association with depression proneness. *Personality and Individual Difference*, **33**, 921-935.
- Flett, G. L., Hewitt, P. L., Oliver, J. M., & Macdonald, S. (2002). Perfectionism in children and their parents: A developmental analysis. In G. L. Flett & P. L. Hewitt (Eds.) *Perfectionism: Theory, research, and treatment*. Washington, D. C.: American Psychological Association. pp. 89-132.
- Frost, R. O., Martin, P. A., Lahart, C., & Rosenblate, R. (1990). The dimensions of perfectionism. *Cognitive Therapy and Research*, **14**, 449-468.
- 福井義一 (2009). 高目標設置は本当に適応的か？——成人愛着スタイルを調整変数として——
心理学研究, **79**, 522-529.
- Hamachek, D. E. (1978). Psychodynamics of normal and neurotic perfectionism. *Psychology*, **15**, 27-33.
- Hewitt, P. L., & Flett, G. L. (1990). Perfectionism and depression: A multidimensional analysis. *Journal of Social Behavior and Personality*, **5**, 423-438.
- Hewitt, P. L., & Flett, G. L. (1991a). Dimensions of perfectionism in unipolar depression. *Journal of Abnormal Psychology*, **100**, 98-101.

- Hewitt, P. L., & Flett, G. L. (1991b). Perfectionism in the self and social contexts: Conceptualization, assessment, and association with psychopathology. *Journal of Personality and Social Psychology*, **60**, 456-470.
- 池田幸恭 (2009). 大学生における親の期待に対する反応様式とアイデンティティの感覚との関係 青年心理学研究, **21**, 1-16.
- 伊藤菜穂子 (2004). 不適切な動機による完全主義が心理的不適応に及ぼす影響 心理臨床学研究, **22**, 542-551.
- 河村照美 (2003). 親からの期待と青年の完全主義傾向との関連 九州大学心理学研究, **4**, 101-110.
- 小堀 修・丹野義彦 (2002). 完全主義が抑うつに及ぼす影響の二面性——構造方程式モデルを用いて—— 性格心理学研究, **10**, 112-113.
- 高坂康雅 (2008). 青年期における劣等感と自己志向的完全主義との関連 パーソナリティ研究, **17**, 101-103.
- McArdle, S., & Duda, J. L. (2008). Exploring the etiology of perfectionism and perceptions of self-worth in young athletes. *Social Development*, **17**, 980-997.
- 大谷保和 (2004). 自己志向的完全主義の2側面と自己評価的抑うつ傾向の関連の検討——統制不可能事態への対処を媒介として—— 心理学研究, **75**, 199-206.
- 大谷保和 (2010). 自己に向けられた完全主義の心理学 風間書房
- 大谷佳子・桜井茂男 (1995). 大学生における完全主義と抑うつ傾向および絶望感との関係 心理学研究, **66**, 41-47.
- 齋藤路子・今野裕之・沢崎達夫 (2009). 自己志向的完全主義の特徴——精神的な健康に関する諸特性との関連から—— 対人社会心理学研究, **9**, 91-100.
- 桜井茂男・大谷佳子 (1997). “自己に求める完全主義”と抑うつ傾向および絶望感との関係 心理学研究, **68**, 179-186.
- 佐藤郁哉 (2008). 質的データ分析法——原理・方法・実践—— 新曜社
- 島 悟・鹿野辰男・北村俊則・浅井昌広 (1985). 新しい抑うつ性自己評価尺度について 精神医学, **27**, 717-723.
- Stoeber, J., & Otto, K. (2006). Positive conceptions of perfectionism: Approaches, evidence, challenges. *Personality and Social Psychology Review*, **10**, 295-319.
- 渡部雪子・新井邦二郎・濱口佳和 (2012). 中学生における親の期待の受け止め方と適応の関連 教育心理学研究, **60**, 15-27.